日本大学
大学史ニュース
2025.09
Vol.29
日本大学広報部広報課（大学史）

目次

◇本学出身海軍予備学生の資料 …… 2
◇武蔵俊英学寮関係資料 …… 2
◇地方文化興隆に貢献した校友・荒木精之 …… 4
◇明治初年の神田西側地域　―学生街ができる前― …… 6



戦時期の校内掲示板（昭和15年10月、三崎町法文科校舎）

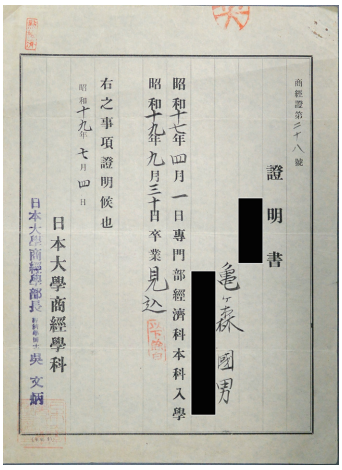
昭和12（1937）年７月に「日中戦争」が始まり、翌月「国民精神総動員運動実施要綱」が閣議決定して以降、しだいに日常生活への統制が強まります。14年６月には国民精神総動員委員会による生活刷新案として、パーマネント禁止などと共に、男子学生・生徒の長髪廃止が決定し、統制は学生生活にも及びます。

写真は、昭和15年10月の法文科校舎内の掲示板です。日本大学では政府方針から一歩踏み込み、10月１日付で「頭髪ヲ丸刈」と決定し「速カニ之カ実行ヲ期ス可シ」との告示が貼られています。しかし、徹底は不十分だったようで、丸刈りにしていない学生もいて、同９日付で16日までに「勇断スヘシ」との達しが掲示されています。

◆本学出身海軍予備学生の資料

本年５月、日本大学第二中学校から専門部経済科に進み、昭和19（1944）年９月に卒業した、亀ヶ森國男の写真アルバムを入手しました。亀ヶ森は、本誌第９号（平成27年９月刊）に掲載した「学徒出征数調査報告」作成に際しての調査で、海軍に入隊したことまでは判明していましたが、復員したか否かは不明でした。アルバムには６点の資料が挟まれており、５点は本学在学中の書類でしたが、１点は戦後の職場での辞令であったため、復員が確認できました。

アルバムは、小学生から海軍予備学生時代までの写真が、年代順に貼ってあります。海軍では、武山（横須賀第二）海兵団で基礎教育中の集合写真があることから、第５期海軍兵科予備学生であったことが分かります。彼らは20年３月から３ヵ月間、術科学校（対空・通信などの専門教育機関）などで教育を受け、６月１日付で少尉に任官し実施部隊（艦船や航空隊など）に配属されました。アルバム最終頁の写真には、「九州川棚突撃隊兵舎に於て」「20.４.８　彼杵駅前に於て」と説明があることから、術科教育は魚雷艇や水上特攻兵器「震洋」・水中特攻兵器「回天」などの要員養成を行う、川棚町（長崎県東彼杵郡）の臨時魚雷艇訓練所（海軍水雷学校の付属機関）で受けていたと思われます。（髙橋）



経済科卒業見込証明書


武山海兵団での集合写真
（最後列右から５人目が亀ヶ森）

〔参考文献〕
小池猪一編『海軍予備学生・予備生徒』第２巻（国書刊行会、昭和61年）

◆武蔵俊英学寮関係資料

令和５（2023）年３月31日、日本大学武蔵俊英学寮が閉寮となりました。当課では、寮を管轄していた本部学生課から、令和元年度末と４年度末に併せて519点の関係資料を受け入れ、この度整理を終えました。



第23回寮祭チラシの原版
（昭和60年）


ソフトボール大会（平成11年10月４日）

現在、本学には７ヵ所（首都圏６ヵ所・郡山１ヵ所）に学生寮がありますが、日本大学が運営した最初の学生寮は、昭和３（1928）年に武蔵野町（現武蔵野市）大字吉祥寺に建てられた専門部歯科の武蔵野学寮で、４～15年度までに入学した歯科の１年生は全員寮生活を送りました。しかし、戦時体制下、物価の高騰と物資の入手が困難になったことなどから、16年３月で閉寮しました。

そして、戦中・戦後を挟んで21年後の昭和37年６月、首都圏のキャンパスに通う学生を対象として武蔵野市関前に武蔵俊英学寮が開寮しました。なお、首都圏から離れた三島キャンパス（現国際関係学部校地）は予科が開設した21年の10月、郡山キャンパス（現工学部校地）は専門部工科が移転した22年の９月に学生寮を開寮していますが、武蔵俊英学寮と前後して、37年４月には三島俊英学寮、翌38年４月には第二工学部（後に工学部）俊英学寮が、新

たに開寮しました。

受け入れた資料群の概要は、管理・運営関係の文書類155点、寮生活を写した写真類（アルバムやネガフィルムなど）137点、入寮・卒寮の際の宣誓書・答辞・送辞など50点、寮祭のプログラムやチラシが36点、寮生が作成した文芸誌など32点がまとまった資料です。年代は、主に昭和40年代～平成10年代で、一定の年代に集中することなく分散しています。また、数点ですが、先に閉寮している三島俊英学寮や工学部俊英学寮に関する資料も含まれています。



寮祭のプログラム
㊧第３回（昭和39年）㊨第26回（昭和63年）

年代がはっきりしている一番古い資料は、昭和39年11月20・22・23日開催の第３回寮祭のプログラムで、資料群の中で30年代と確認できる唯一の資料です。寮祭のプログラムは、以降、14回（同51年）・18回（同55年）は抜けているものの、平成２（1990）年開催の第28回までが揃っています。表紙を並べると、デザイン画や、大学紛争後の第８回以降つけられるようになった開催テーマに、時代の変化を感じられ興味を引き付けられます。なお、第７回に関しては紛争のため中止となったことが、第８回プログラムの（実行）委員長挨拶文の中で説明されています。

年代の一番新しい資料は、武蔵俊英学寮のパンフレットです。正確な年代は不明ですが、平成19年６月に決定した「自主創造」のロゴが入っていることから、それ以降に作成されたことは確かです。

文書類は、寮の管理人が毎日記載する管理日誌や献立表といったルーティーンの資料、給水設備自主点検記録表、防災に関する消防計画書や消火栓配置図といった管理関係書類、入寮研修や卒業式式次第などの入卒寮関係資料などで、中には、就職祝いをするために寮の一室の使用を希望する届出文書なども含まれています。また、寮生自らが主宰するサマースクールや寮祭の運営・決算報告書、寮生たちによる寮の運営委員会である俊桜委員会関係資料などの文書も残っていて、寮生活の様子を知る手掛かりとして貴重な資料といえます。

寮生による文集『メルヘン』などの文芸誌も数誌あり、学生たちの娯楽活動の一端がみてとれます。また、寮生としての立場での作品ではありませんが、報道カメラマンとして知られ本学芸術学部の客員教授を務める宮嶋茂樹氏（昭和59年芸術学部写真学科卒）が、在寮中に写真学科の同級生３名と作成した写真集『LE VENT』（フランス語で「風」）のNo. １・２が、寮祭プログラムや文集の束に含まれていました。



寮のパンフレット（平成20年頃）
㊧表紙　㊨内容の一部

その他、卒寮生のOB会である日本大学武蔵俊英学寮寮友会から寮に送られた品々（ワープロや浴室用防水時計など）の目録、寮長から本部学生部への報告書、寮歌のカセットテープや楽譜など、60年余りの歴史を重ねた多様な資料が含まれており、昭和後半から平成にかけての、学生寮の様子を垣間見ることができます。　（髙橋）

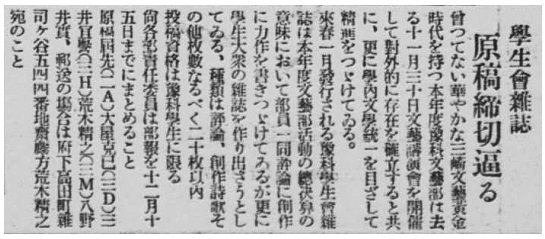
◆地方文化興隆に貢献した校友・荒木精之

荒木精之（せいし）は、本学法文学部文学科の卒業生で、故郷・熊本県で長きにわたり文化興隆に尽くした人物です。『日本大学大学史ニュース』第19号（令和２年７月刊）の「三島由紀夫の転機に関わった校友―坂本一亀・小島智雄・荒木精之・伊達宗克―」の記事において、三島が『豊饒の海』第２部『奔馬』を執筆した折に、神風連（しんぷうれん）の乱（明治９年に熊本で起こった士族反乱）の調査に荒木が協力したことを取り上げていますが、今回は、この荒木について改めて紹介します。

荒木は、明治40（1907）年１月、熊本県阿蘇郡長陽村（現在の南阿蘇村）で教員の両親のもとに生まれました。小学校卒業後、逓信講習所を経て郵便局に勤務していましたが、文学を志していた荒木は、仕事を辞めて進学することを決断します。独学で大学予科に入学するための資格を得て、昭和３（1928）年４月、21歳の年に日本大学予科文科に入学しました。日本大学への入学は、荒木にとって夢への第一歩でした。



荒木が編集・執筆に関わった雑誌
（荒木いおり氏寄贈）


學生會雜誌
原稿締切遲る
曾つてない華やかな三輯文藝賞金
時代を持つ本年度學科文藝部は去
る十一月三十日文藝講演會を開催
して對外的に存在を確立すると共
に、更に學内文學統一を目ざして
精進をつゞけてゐる。
來春二日發行される豫科學生會雜
誌は本年度文藝部活動の總決算の
意味において部員一同評論に創作
に力作を書きつけてゐるが更に
學生大衆の雜誌を作り出さうとし
てゐる、種類は評論、創作詩歌そ
の他枚數なるべく二十枚以内
投稿資格は豫科學生に限る
尙各學部責任委員は部數を十二月十
五日までにまとめること
原稿同先〇一A)大屋克巳(三D)三
井宜藏(三H)荒木精之(三M)八野
井貞一、郵送の場合は府下高田町雜
司ケ谷五四四番地豊饒方荒木精之
宛のこと

『学生会雑誌』の原稿募集記事。荒木精之の下宿が原稿郵送先となっている
（『日本大学新聞』164号、昭和５年12月10日付、４面）



予科学生会が当時文壇で活躍する人々を呼んで講演会を行ったときの写真カ。後列右から１番目が荒木精之。前列左から３番目は林芙美子と思われる（荒木いおり氏提供。現在はくまもと文学・歴史館所蔵）

荒木が入学した年の５月、予科文科で大きな事件が起きました。同盟休校（ストライキ）です。本学初の同盟休校となったこの事件は、学部・専門部にも影響を及ぼしました。荒木はのちに大学ゼネストに加わり、警察署にも拘留されたといいます。また、このころの学生雑誌や同人誌がプロレタリア文学一辺倒であったことから、荒木はしだいに左翼系文学グループと接近していきました。

昭和６年、荒木は予科文科を修了して法文学部文学科に入学しました。史学を専攻して羽仁五郎の下で学び、昭和９年、卒論「明治初期文学の歴史的研究」を提出して卒業しました。

日本大学時代の荒木は文芸部で活躍し、『学生会雑誌』の編集に携わったほか、『尖兵旗』『近代文学』『新早稲田文学』といった学内外の文芸誌に執筆していました。在学中の昭和７年に中編小説『青年作家』を処女出版します。

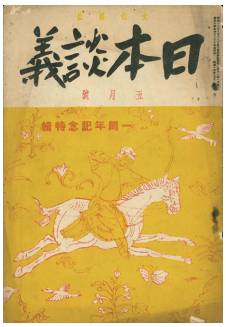
しかし荒木は文学をする場としての日本大学には納得がいかなかったようで、昭和７年６月の『日本大学新聞』への寄稿「文学する態度―日大文科への文学の狼火を挙げよ！」の中では、「思うに日大程、文学の種子が成長しないところはめずらしい。」と、日本大学に文学が根付かない現状を嘆き、日大生に、学内の「ディレッタント」（文学の愛好者）にとどまるのではなく、社会に目を向けて文学を志すことを訴えます。先に紹介した『青年作家』においても、本学をモデルにしたと思しき「Ｎ大学」に通う青年が同人作家として苦心惨憺する姿が、荒木の実体験に基づき描かれています。

卒業後は東京で文芸活動を続けることを希望していましたが、継母が経営する隈府（わいふ）女子技芸学校（現在の菊池女子高等学校）の教壇に立つことを強く要請され、やむなく帰郷します。教員となった後も執筆を続け、昭和10年に長編小説『環境と血』を出版しますが、この本は残念ながら発禁処分を受けることとなりました。

荒木は昭和12年に学校を退職し、再び上京する準備を始めます。ところが、同年７月に盧溝橋事件を発端として日中戦争が

勃発したことにより、それは叶わないものとなりました。第一補充兵役（徴兵検査に合格したが、定員超過により入営しなかった者）であった荒木は、いつ召集されるか分からないことから上京を諦め、地元での文芸活動に一層力を入れるようになります。

翌13年、荒木は地元熊本にて文化雑誌『日本談義』の刊行を始めました。同誌には、文芸だけでなく、歴史、評論、芸術、経済、自然、教育など多彩な分野の原稿が掲載されました。創刊号の編集後記で荒木は「地方で雑誌を出すといふことは真面目な雑誌であればあるほど困難だといふことは一つの常識である」と認識しつつも、『日本談義』出版にあたって100名を超える維持員（支持者）を得て刊行に至ったことへの自信と未来への希望を述べています。成功しづらい「地方主義」をあえて掲げて刊行された『日本談義』は、その後の戦争や度重なる災害にも負けず、荒木の生涯の仕事となり、昭和57年４月まで全464号が刊行されました。



『日本談義』
昭和14年５月号
（一周年記念特輯号）

荒木は、文芸活動と並行して、地域の文化・教育振興の面でも活躍しました。のちに三島にも影響を与えることになる神風連の人々の墓の丹念な調査や顕彰、熊本出身の文学者である徳富蘆花らの文学記念碑建立、横井小楠をはじめとする熊本における維新期の功労者の顕彰や合祀、文化財の保全、県や市の各種委員など、さまざまな活動を行いました。昭和35年に小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が熊本で最初に住んだ家が解体の危機に瀕した際には、荒木は地元有志とともに小泉八雲旧居保存会を結成し、現在地への移築を実現しています。荒木が保存活動に取り組んだこの家は、NHKの2025年度後期連続テレビ小説「ばけばけ」で小泉八雲夫妻が取り上げられることになり、改めて注目を集めています。



荒木が保存活動に関わった小泉八雲熊本旧居
（熊本県熊本市中央区安政町）

昭和37年には熊本県近代文化功労者として表彰され、昭和45年に熊本県文化協会会長、昭和48年に熊本県芸術文化振興会副会長を務めるなど、県下の文化振興団体の要職を歴任しました。このころ、日本大学校友で教育職にある者の職域校友会である桜師会の熊本県会長も務めました。

昭和50年、68歳の年に、荒木家と縁深い菊池市に、荒木精之文学記念碑が建立されました。昭和53年には財団法人神風連資料館を開館して理事長となり、その後も幕末の人斬りとして知られる河上彦斎（げんさい）百十年記念祭の開催、自らが出版する『日本談義総合索引目録』の執筆などに邁進しますが、昭和56年12月30日に急逝しました。享年74歳。



荒木精之文学記念碑
（熊本県菊池市隈府）

末尾になりますが、この度、荒木精之ご息女のいおり様より、荒木が本学在籍時に関わった雑誌等21点を寄贈いただきました。昭和初期の学生の活動が分かる貴重な資料として、今後活用してまいります。また、写真の掲載にあたり、いおり様ならびにくまもと文学・歴史館に許諾いただきました。記して御礼申し上げます。　（上野平）

〔参考文献〕
『昭和三十七年度顕彰　熊本県近代文化功労者』（熊本県教育委員会、昭和37年）、『日本談義』通巻四六四号・復刊第三七七号・四月号（日本談義社、昭和57年）、荒木精之『荒木精之著作集　青年作家』（熊本出版文化会館、平成６年）、荒木精之『荒木精之著作目録　付・消えていった日々』（熊本出版文化会館、平成６年）、須田耕史『荒木精之物語』（荒木精之顕彰期成会、平成11年）

◆明治初年の神田西側地域　―学生街ができる前―

本学の法学部・経済学部（神田三崎町）、歯学部・理工学部（神田駿河台）がある地域は、「神田学生街」と称され、明治期より学生・学校が多い地域として知られています。この地域には数多くの学校が設立され、周辺には古書店街などの学生を対象とした商店が立ち並んでいます。本学も神田地域に長く校舎を構えていますので、「神田学生街」の形成過程を知ることは、本学の歴史を考える上でも重要なテーマといえます。今回は、「神田学生街」ができる以前の明治初年のこの地域について紹介していきます。

現在の水道橋駅から御茶ノ水駅にかけて学校・学生が多い地域を「神田学生街」と呼んでいますが、そもそも、この地域が「神田」と呼称されるようになるのは、明治11（1878）年７月に郡区町村編制法・府県会規則・地方税規則（三新法）の施行により東京府に15区が置かれ、そのひとつとして神田区が設置されたことによります。本来、神田という地名は「神田学生街」東側の日本橋から続く町地（一部は武家地）を指す名称でしたが、神田区が設置されて以降、後に学生街と称される旧武家地域も神田と称されることとなりました。ちなみに神田西側地域一帯は、江戸期は駿河台・小川町と称されていました。幕末の万延元（1860）年、法学部本館のある地域には幕府の講武所が築地から移転してきましたが、この講武所は「小川町講武所」と呼ばれました。このように、同じ「神田」といっても、武家地と町地という異なる性質を東西でもつため、明治以降、異なる発展をたどることとなります。

明治元年４月、新政府軍による江戸城の無血開城、５月の上野での彰義隊との戦闘を経て、８月に東京府が設置されました。東京府の急務は、旗本などが離散して荒廃した武家地の復旧と治安回復にありました。明治２年当時、武家地の面積は市街地全体の約７割を占め、残り15％が町地、15％が寺社地でした。とくに神田学生街となる武家地域及び隣接する麹町付近は、外濠の内側で利便性が高い土地であるため、官員（役人）の邸宅地、あるいは諸官庁の敷地として利用されていきます。

明治初年の東京府の土地政策、とくに旧武家地の土地利用については、目まぐるしく変化しました。明治元年８月、江戸城外堀より内側（郭内）にある旗本屋敷の建物と土地は、新政府にすべて召し上げられました。後に学生街となる神田西側の武家地域もこれに該当します。この召し上げた旗本屋敷について、当初、東京府は地代をとって新政府の官員などに貸すこととしました。しかし、荒廃した旗本屋敷は修繕費・建設費が膨大にかかるため、むしろ、屋敷地を官員に安く払い下げて、屋敷の建設・修復を行わせ、都市復興を推進する方向に舵を切ることとなります。この時期の神田西側地域は、土地はあっても居住する建物が不足していました。



第４大区沽券地図（第４大区１、２小区　東京都公文書館所蔵、ZH-666）
公家、旧藩主、皇族邸宅地、官有地を示すため一部を加工した。左上の白い官有地は、法学部本館が所在する神田三崎町付近。

廃藩置県後の明治４年９月、東京府はこれまでの武家地、社寺地、町地の区別を廃止し、すべてから地税を徴収する方針を打ち出しました。そして、明治５年以降、順次地券を発行することとなり、それまで町名の無かった武家地域にも町名がつけられることとなりました。神田西側地域の三崎町、猿楽町、神保町、錦町などの町名は、地域で古くから使用されている呼称を踏まえてこのときにつけられたものです。

この明治５年頃から、江戸時

代の神田武家地には居住していなかった階層の人々が居宅を構えていきます。ひとつは公家たちです。明治２年６月、版籍奉還後に大名（諸侯）と公家（公卿）は華族と称されることとなりました。明治５年２月、東京居住の公卿華族は、京都の邸宅地を返納する代わりに、京都の坪数に応じて東京の土地が与えられることとなります。これにより、神田西側地域や麹町などの旧武家地には、公卿華族の居宅が構えられていきました。また、明治６年５月５日、皇居が炎上した際、仮の皇居が赤坂におかれましたが、このとき皇族の邸宅地を確保する必要も生じました。そして、麹町や神田西側地域に皇族の邸宅地が設置されていくこととなります。

このように、江戸時代は旗本屋敷と大名屋敷しか無かった神田西側地域には、明治初年から公卿華族と皇族の邸宅地が増えていきました。明治６年12月、東京府は土地の所有者、面積、売買価格を把握するため、東京市街地をほぼ網羅した「沽券地図」を作成しました。この地図を見ると、神田西側地域の公卿華族、皇族の邸宅地が良く分ります。当時の行政区画は大区小区制で、神田西側地域は「第四大区一・二小区」でした。この区域は、神田学生街の地域とほとんど同じ地域ですので、学生街となる以前の様子がよくわかります。

この地図によると、現在、日本大学図書館法学部分館がある区域（現・西神田、旧・西小川町）には、「北白川宮」「伏見宮」の邸宅地がありました。北白川宮の邸宅地（図書館の裏側、現・西神田コスモス館付近）には、明治17年に獨逸学協会学校（現・獨協学園）の校舎が新築されています。

また、公卿華族は、神田西側地域に27件の邸宅地がありました。沽券地図上では旧佐賀藩士安永弘行の邸宅地となっている三崎町１−１（現・経済学部６号館付近）は、後に姉小路公義の屋敷となります。この姉小路家の家令を勤めていたのが跡見花蹊（かけい）の父で、花蹊は華族の子弟教育をこの地ではじめ、明治８年、中猿楽町13（三崎町交差点付近）に跡見学校（現・跡見学園）を開校しました。このほか、明治10年には神田錦町に華族学校である学習院が開校しています。跡見学校や学習院が神田西側地域に開校していることは、この地域が華族教育をする上で利便性の高い土地であったことを物語っています。

このように、幕末は武家地域であった神田西側地区は、明治初年以降、官員の邸宅地となる一方で、皇族、華族などの邸宅地となりました。のちに多数の学校が設置される神田西側地域ですが、明治６年１月「開学明細調」によると、この時期、８校の私塾があったことが確認できます。千代田区のその他の地域には86校（神田東側地域52校、旧麹町区域34校）の私塾があることから、むしろ私立の学校数は少なかったといえます。この私立の学校数が少ない神田西側地域が、どのような過程を経て学生街となっていくのかを検討するには、明治20年代頃までの地域資料をさらに調べる必要があります。ただ、この地域は火災が多く明治期の資料が少ないため、神田西側地域に所在した学校が所蔵する資料こそが、この地域の変遷を知る手がかりとなると考えます。

これまで、神田地域の歴史は、東側の旧町地を中心に語られることが多く、旧武家地である西側地域は十分に検討されていません。この地に学生街が出現する要因は、東京大学法・理・文学部（大学南校、開成学校）、東京大学予備門、東京外国語学校などの官立の学校があったことが大きいのですが、私立学校が数多く創立されたことや学生を顧客とする商店の展開も学生街を形成する重要な要素です。外濠の内側にあり、ほぼ低地でありながらすべてが武家地であったという神田西側地域の特殊性が学生街成立にどのような影響を及ぼしたのか、今後さらに検討していきたいと思います。

（松原）

〔参考文献〕
鷹見安二郎『區制沿革：名主制から区制まで』都史紀要３（東京都総務局文書課、昭和25年）
川崎房五郎『明治初年の武家地処理問題』都史紀要13（東京都、昭和40年）
鈴木理生『明治生れの町　神田三崎町』（青蛙房、昭和53年）
『獨協学園史1881−2000』（獨協学園、平成12年）
『跡見学園　―― 一三〇年の伝統と創造』（跡見学園、平成17年）
松山恵『江戸・東京の都市史　―近代移行期の都市・建築・社会―』（東京大学出版会、平成26年）

活　動　報　告

令和７年１月～令和７年６月

（大学史に関する活動）

〇調査・研究

１月20日	平島及平関係資料調査（国立国会図書館）
１月21日	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会定例研究会（神奈川大学）
１月23日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（パルテノン多摩）
１月29日～31日	学祖山田顕義・平島及平及び校友等関係資料調査（熊本県熊本市・菊池市）
１月31日	旧軍用地関係資料調査（昭和館）
２月12日	松岡康毅関係者等史蹟調査（東京都青山霊園）
３月13日～14日	郡山校地関係資料調査（福島県福島市）
３月18日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（学習院大学）
４月23日	平島及平及び校友関係資料調査（国立国会図書館）
５月８日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（オンライン）
５月15日～16日	郡山校地及び校友関係資料調査（福島県福島市・郡山市）
５月22日	清水建設歴史資料館展示調査（東京都江東区）
５月28日	平島及平関係資料等調査（国立国会図書館）
６月15日	学祖山田顕義関係資料調査（栃木県那須町）
６月18日～20日	平島及平関係等資料調査（熊本県熊本市・玉名市）
６月26日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・総会・記念講演会（青山学院大学）

〇展示

１月８日～３月31日	専門部医学科から医学部へ―医学部創設100周年―（日本大学会館２階）
４月１日～６月30日	創立期の時代と社会（日本大学会館２階）

〇研修・講演

１月27日	日本大学校友会宮城県支部　大学史講演（江陽グランドホテル）
４月９日	日本大学藤沢高等学校・中学校　学祖及び自校史講演
５月８日	日本大学鶴ヶ丘高等学校　学祖講演
５月８日	日本大学スポーツ科学部　大学史講演

当課発行の『大学史論輯　黌誌』については、日本大学リポジトリで閲覧が可能となっております。
（https://nihon-u.repo.nii.ac.jp/）
本誌の内容および日本大学の大学史に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

日本大学広報部広報課（大学史）
E-mail : nuhistory@nihon-u.ac.jp

日本大学大学史ニュース
第29号
令和７年９月１日
編集・発行　日本大学広報部広報課（大学史）
〒102-8275　東京都千代田区九段南４-８-24
TEL 03-5275-8444